

# まゆだま 通信

## News Letter

文部科学省 女性研究者研究活動支援事業

発行  
国立大学法人群馬大学  
男女共同参画推進室

〒371-8510  
群馬県前橋市荒牧町 4-2  
TEL:027-220-7146  
FAX:027-220-7143  
mail:kyodo-sankaku@jimu.gunma-u.ac.jp  
HP:http://kyodo-sankaku.gunma-u.ac.jp/

2015.3  
vol.6

## 群馬大学女性研究者交流会

# 第2回 まゆだま会 全学ランチミーティングを開催！

意識啓発WG

理工学府 教授 工藤 貴子

文部科学省女性研究者研究活動支援事業「まゆだまプラン」の一環として、第2回まゆだま会全学ランチミーティングが平成26年12月25日(金)にペーカリーカフェレンガ(群馬大学桐生キャンパスよりすぐ)にて開催されました。本来この会は、学内の女性教職員と女子学生同士が分野や立場の違いを越えて情報交換することを目的としていますが、今回はそれに加えて男性教職員と男子学生にもご参加いただきました。ちなみに、今年度理工学府で採用された4名の女性研究者も全て参加していただきました。

篠塚和夫理工学府長から開会の挨拶と男女共同参画推進委員会委員長である平塚浩士理事の挨拶に引き続き、男女共同参画推進室長の末松美知子教授(社会情報学部)から「まゆだまプラン」の取組の内容紹介、更に、男女共同参画推進室員の長安めぐみ講師による学外における男女共同参画活動状況の説明があり、その後は男女教職員と学生を含む幾つかのテーブル毎での参加者同士の交流へと続けました。37名(男性8名、女性29名)の参加者はノコギリ屋根のある桐生の歴史的建造物の会場で推進室スタッフによるクリスマスムードを盛り上げるセッティングの中、焼きたてのパンやケーキの昼食をとりながら交流を楽しみました。

アンケートでは、学部や立場(教職員や学生)の異なる人達との交流が出来て良かったとする意見が多く聞かれ、ランチや会場の雰囲気も好評でした。初回とは異なり、参加対象者を女性だけでなく男性まで広げた事は「男女共同」参画の趣旨により合致し、交流も盛り上がっていたように見えました。男女共同参画活動に対する考えは個人によって異なってもそれを交換し合えるこのような機会の重要性は明らかで、このイベントは今後も継続していく予定です。



# 第2回研究力アップ講座開催

「研究活動に役立つプレゼン～日本語でも英語でも基本は同じ～」

まなび株式会社 代表取締役 大塚 雅文氏

1月27日(昭和キャンパス)、28日(荒牧、桐生キャンパス)にて第2回研究力アップ講座「研究活動に役立つプレゼン～日本語でも英語でも基本は同じ～」を開催しました。

今回のテーマは国際的な研究活動の場で役立つグローバルな視点に立ったプレゼンテーション方法について、企業の管理職のコーチングを多数経験されているまなび株式会社大塚雅文氏をお招きしての講座には、3キャンパスで総勢150名が参加しました。

プレゼンテーションの9割は壇上に上がる前に決まる。最初の3分でいかに聴衆を掴むかも重要。ポイントは①何を伝えたいのか?②聴衆のメリット **WITFM** (What's in it for me?) は何か?③なぜあなたが伝えるのか?の3つ。

付箋を活用したストーリーボードで提示する内容や順番を精査し、一番伝えたいコアメッセージを大切に、盛り込み過ぎないことが重要とのこと。日本人が外国で言葉のハンディを抱えながら、異なる文化を持つ人に伝えるためには聴衆を事前に分析し、シンプルな表現を用い、解りやすいスライドを提示することが必要です。大事なプレゼン時には、講師も自ら自分のプレゼンをビデオに録ってチェックするというエピソードを話され、「自分が話している姿を見れずして、なぜ聴衆があなたを見ていられるのか」とプレゼンの厳しさを伝えられました。

今回も若手の研究者や学生が多数参加し活気ある講座になりました。「早くプレゼンを試してみたい」と前向きな感想も聞かれました。



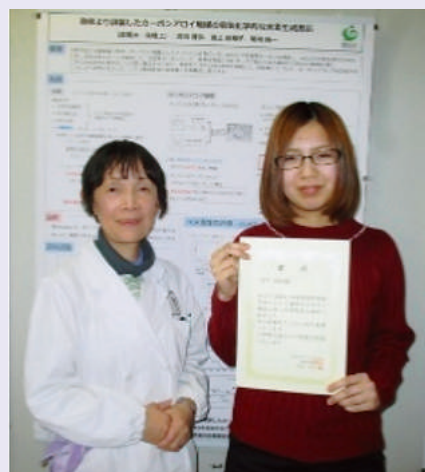
## 第1回研究力アップ講座

「研究活動に役立つデザインの基本」受講者

ポスター賞受賞

前回の研究力アップ講座に参加した理工学府大学院生吉川理沙さん(環境創生教育プログラム尾崎研究室)が平成26年度「炭素材料学会年会ポスター賞」を受賞しました。講師の片山なつ氏からも激励のメッセージが寄せられました。(写真は吉川理沙さんと研究指導担当の瀧上真知子研究員)

尚、片山なつ氏の著書『伝わるデザインの基本-よい資料を作るためのレイアウトのルール』(技術評論社)は、各まゆだま広場で貸し出しを行っています。





～男女共同参画推進室 室員より～

## おじさん世代の驚き

支援体制・環境整備WG  
医学系研究科 教授 荒川 浩一



私が本学を卒業した昭和58年は、共通一次試験（現在のセンター試験）開始前で医学部女子学生が希少でした。共通一次試験が定着後、女子学生が急に増えて驚いたのを覚えています。卒業後、小児科学教室に入局しましたが、当時は出産予定の年度には関連病院勤務から外れるのが暗黙の決まり事で当然のように思っていました。平成3年にスウェーデンに留学したばかりのころ、街角でベビーカーを押して散歩している多くの若い父親の姿を見て驚き、不景気で失業中の人々が溢れているのかと勘違いいたしました。それでも当時は、男性の育児休暇取得率は10%程度であったようです。その後、1999年に父親専用の育児休暇が法的に作られ、育児休暇期間の1年4ヶ月のうち、60日はママ専用（ママクオータ）、60日はパパ専用と決められました。その結果、男性の育児休暇取得率は驚くべきことに80%になっているそうです。所得保障も充実して経済的側面からも子育て支援となっています。このような家族政策や女性解放政策、さらには子ども手当、20歳までの医療費無料、大学院までの教育費無料などの制度によって、スウェーデンでは出生率も回復し少子化に歯止めがかかっているようです。我が国でも、真の男女共同参画の確立や少子化対策には、政治や行政という発言権のある場に女性が多く登用されること、それに消費税25%が必要かもしれないかもしれませんが、まずは出来るところから進めていきましょう。

～男女共同参画推進室 室員より～

## 改めて‘人との出会いは素晴らしい’

意識啓発WG  
理工学府 助教 村岡 貴子



男女共同参画推進室員として本事業に携わることで、刺激を受ける多くの機会に恵まれています。専門分野は有機遷移金属錯体の合成と機能開拓で、典型元素と遷移元素の結びつきによって創生される多様な性質に興味を持っています。他の理工系分野と同じく、本分野の女性研究者の割合は低いように思われます。幸いにして、性別を理由にした不当な扱いを受けた経験はなく（気が付いていないだけかも?!）、女性が少ない状況にも半ば慣れて、危機感もありませんでした。

ところが本事業で、様々な分野、世代の女性研究者・働く女性に出会う機会に恵まれ、危機感が少し生じました。高い能力を存分に発揮され、家庭・仕事・趣味をバランスよく楽しんでおられる姿はとても眩しく、なぜ理工系に女性が少ないのか考えるようになりました。女性が生涯研究者を続けることは、‘恵まれた環境にいる人だけに許される特権’のように感じていた私は、様々な苦難、危機的状況を乗り越えて活躍されている多くの女性の存在を知り、働き続けるための環境整備、職場の雰囲気作りが重要であることを学びました。常日頃から、周囲の方々と信頼関係を築いておくことも大切です。女性研究者が少しでも増えることを願って、これからも本事業にご協力できればと思います。

# 平塚理事インタビュー ～ 男女共同参画を語る～

インタビューー 平塚 浩士 男女共同参画推進委員会委員長  
(理事《研究・企画担当》・副学長)

インタビューアー 末松美知子 男女共同参画推進室長  
(副学長)



## 職場から早く帰ることのできない現在の働き方

末松：男女共同参画についてのお考えをお願いします。

平塚：私の妻はいわゆる共働きで小学校の教師をずっとしていたので、男女共同参画の活動に関して違和感は全然持っていませんでした。

末松：家と職場を分けて、職場では男性が中心と思われる方が今でも多いと思います。

平塚：大学もそうですが、働き方というのが職場に長くいる方が良いという考えがあります。その考え方が日本人の働き方を歪めてきたと思います。本当はみんな早く帰りたいと思うのです。米国に留学していた時に米国の研究者は5時ぴったりにいなくなります。残っているのは日本人と中国人だけ。東洋と西洋の宗教的な考え方の違いもあると思うのですが。向こうの人からすると長時間労働はフェアではないと言います。

末松：成果はどのようなのですか？

平塚：成果は米国人の方が良いと思います。というのは、良い成果を挙げるには考える時間が非常に重要だと思います。日本人は徒に長時間仕事をして、考える時間よりも手先を上手く使って名人芸をやるというような方向に行っていたと思います。

末松：職場から早く帰って他の事をするのが不安なのでしょうね。それがプラスになるとなかなか思えない。

## 変化が見えてきた理工学部

末松：今後の事業でやはり一番のポイントは理工学部になるかと思いますが、先生のお考えを是非お願いします。

平塚：先日、理工学部の新年会に参加したところ新しく着任された女性の研究者の方々が出席なさっていて、新年会自体の雰囲気ががらっと変わって和やかになっていました。やはり女性の研究者の方を採用していただいて凄く良かったと思いました。

末松：リラックスした？

平塚：ちょうど、私が行った時、新任の女性の先生がご挨拶なさっていて、とても和んだ感じを受けたのです。笑いが多かったです。その瞬間に私は全然違うと思いました。

末松：それが研究や大学の良い方向に繋がっていくと思われますか？

平塚：必ずそうなると思います。全然違う方向から

見ていただくことが非常に重要だと思います。やはり男性社会というのはこう非常に厳しくて、失敗を許さないというか。そういう感じが非常に強いので、ちょっと和むと良い方向につながると思います。

末松：これは個人的印象ですが、男性の方がレールを踏み外すことを恐れていらっしゃるのを感じます。女性の方が紆余曲折あっても、最終的に辿り着けば良いと、柔軟に対応できる傾向にあるかと思えます。その両者が一緒にいるとお互いに良い影響があるのかなと思います。

平塚：私もそう思います。男性はある意味で折れやすいという傾向があります。柔軟性に欠けるとも思えます。それを女性が補っていけるのが良い社会になるのだと思います。

末松：確かに学生への指導も男性と女性の教員がいれば全然雰囲気は違ってきますね。

平塚：現段階では化学系の女性研究者数が倍増しました。今後は電気系や機械系の方に頑張っていただいて、更に増やしていただきたいと話しています。



## 今後の男女共同参画とダイバーシティ

末松：これからの男女共同参画はダイバーシティという方向に向かっていくべきかと思いますが、その辺はどうお考えですか。

平塚：ダイバーシティがなければ、何か危機があった時にやっていけなくなる。どうやって強靱な組織にしていくか、そのためには女性、若者、外国の方も入れて変えていくということだと思います。若い人はそのあたり柔軟かなと思います。今大学はグローバル化を進めていますので、どんどん学生さんに外国に行って様々な経験をしてもらいたいと思います。ダイバーシティを持っている組織が普通なんだということを知っていただくと良いと思います。

末松：では、最後に今後の男女共同参画推進事業についてお願いします。

平塚：是非これは成功していただきたいです。潜在的なサポーターに声を掛ければどんどん参加してくれると思います。皆さんの積極的な参加を希望します。